

渡辺 忠章

勝見
勝江

右端が私

A black and white photograph of a person, likely a Native American, standing in front of a large, decorated structure. The person is wearing a light-colored, patterned garment and is holding a bow and arrow, aiming it towards the right. The structure behind them has a dark, textured surface with a large, light-colored, curved object, possibly a paddle or a piece of wood, attached to it. The overall scene suggests a traditional or ceremonial setting.

右端が私
景気の現況、就活の厳しさ
これを乗り切るには簿記
と珠算は3級以上が必要
条件で、早急に取れ。こ
の言葉が矢となり俺を貫
いた。俺は先生の獲物
だったのだ。

(静岡弁です)



勝山
葆しげふ

まもなく喜寿を迎える。老前整理の本を参考に捨てるものを積み上げていたら、四冊の日記帳が出てきた。あまりの懐かしさに捨てるに捨てられず感慨にふけつていた。まさにそんな時に、同窓会報への寄稿依頼が来た。

静商を受験した理由は何だったのか、日記の中に見つけることができた。私の家は、父親を戦争で亡くし清沢村という寒村の母子家庭だった。私は母の生活を楽にさせてやろうと、中学卒で就職しようとひたすら考えていたことが書かれている。中学3年の9月22日（月曜日・晴れ）担任の先生がわざわざ家に来てくれたのだ。進学について母親と話し合い、将来を考えると今が絶対に思案のしどころと、勧めた学校が静商だった。今に思えば人生を決定づけた最大の出来事だった。卒業後は、望みの日本勧業銀行に就職した。四六年にわたり勤めることができた。退職後は、健康であることの幸を感じ、孫たちとの遊びにも幸せを感じています。現在も、一日一万歩のウォーキングを日課とし、昔懐かしいハーモニカを習って、童謡、演歌と憧れの名曲を楽しんでいます。

